

三位一体主日・聖霊降臨後第1主日 マタイ28章16―20節

〔直訳〕

- 16 だが十一人の 弟子たちは 行った
ガリラヤへ
山へ、ところの 指定した 彼らに イエスが。
17 そして 彼を見て 彼らはひれ伏した。
だがその者たちは 疑った。

- 18 そして 近づいて イエスは 語った 彼らに 言いながら、
「与えられた 私に すべての 権力が
天の中で そして 地の上で。

- 19 だから行って
あなたがたは弟子としなさい すべての 民を、
洗礼を授けて 彼らに 名の中へ 父と子と聖霊の、
20 教えて 彼らに 守ることを すべてを
ところの 私が命じた あなたがたに。

そして 見よ 私は あなたがたと共に いる
すべての 日々 世の終わりまで。」

〔新共同訳〕

16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。17 そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

①ガリラヤの山で（16―17節）

①a 「だが」

16節冒頭の「だが」は、「さて」の意味でも使う（新共同訳）。また、前の文章に対立する新しい文章を導入する言葉として「だが、しかし」の意味でも使う。後者であれば、祭司長の差し金で、イエスの弟子たちがその遺体を盗んだと兵士たちが言いふらしていたのに対して、「だが、十一人の弟子たちは…」の意味になる。

①b 「弟子」

新約聖書における師弟関係は、単に特定の知識をやりとりする関係ではない。弟子は師イエスと行動を共にし、イエスの手足となって働く者である。この関係は弟子が持つ善良さや優秀さによって成り立つのではない。それはイエスの呼びかけに自由に応えることによって生まれた信頼関係である。

⑦イエスの弟子と呼ばれるのは、まずイエスを選んだ十二人である（マタ十一、一二一）。だが、十二人に限らず、イエスに従う人々は弟子であり（マタ一二一など）、イエスを支持する人々の大群も弟子と呼ばれる（ルカ六 17、一九 37）。さらには、イエスがこの世を去った後でもイエスに従う人々は弟子と呼ばれることもあり、特に使徒言行録は新しい宗教共同体のメンバーを表すのにこの語を使うので、「弟子」は「キリスト信者」の意味になっている（使六 1・2・7など）。

⑧新約聖書には 261 回の用例があり、もっぱら福音書・使徒言行録で使われ、特にこの語を好んで使うのはマタイ福音書である（マタ 72 回、マコ 46 回、ルカ 37 回、ヨハ 78 回、使 28 回）。マタイ福音書でイエスの弟子と呼ばれる者のあり方には次のような特徴がある。

i まず、弟子は自分の職業や家族から離れてイエスに従う者である（マタ四 18 以下、十 37、八 21 以下）。

ii 第二に、弟子はイエスと一体になって働く者である。十二人の弟子は宣教に派遣されるにあたって、汚れた霊を追ひ払う権能をイエスから授けられる（十一）。彼らとイエスはいわば一つの者として働くので、「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れるのである」と述べられる（十 40）。

iii 第三に、弟子はイエスの言葉や振る舞いを完全に理解しているよりは、むしろ理解できない者として登場することが多い。イエスの行ったパンの奇跡を理解できない弟子たちは「信仰の薄い者よ」と呼ばれ（一六 8）、イエスの受難を理解できず、イエスをいさめるペトロはサタンと呼ばれる（二六 23）。イエスに祈ってもらおうとして子供を連れてくる人々を弟子たちが叱ったのは、彼らが天の国がどのような場所か理解できなかったからである（一九 13）。

© 「ガリラヤ」

当時の人々の感覚ではエルサレムから離れた辺境の地。イエスが宣教活動の大半を過ごしたのはこのガリラヤ。マタイはこの地を異邦人の地に接した場所とし（マタ四 15）、復活者が弟子を待つ所としている（マタ二六 32）。ガリラヤは地上のイエスが生活した場所であるが、その場が復活者イエスとの出会いの場でもある。生活の場を離れたところに復活があるのではない。

④ 「山」

弟子たちはイエスの指示（二六 32、二八 10）に従ってガリラヤに行く。イエスが指示した「山」がどの山であるかは分からない。ガリラヤの「山」は、イエスが弟子たちに「山上の説教」を述べた場所であり（マタ 5 章）、弟子たちの前でイエスの姿が変わり、太陽のように輝いた場所である（マタ 17 章）。「山」はイエスの神的な本性が啓示された所（四 8、一七 1）、イエスの教えが述べられた所（五 1、二四 3）である。

⑤ 「ひれ伏す」

王や神聖な者の前でその人物に対する敬意や崇拜を表す動作（二八 9）。マルコ（五 6、一五 19）とルカ（四 7・8、二四 52）と比べると、マタイでは用例は多く、13 回使われている。その対

象のほとんどはイエスである。博士たちが新たに生まれたユダヤ人の王に対して(二一11)、また、風を静めたイエスに対して舟の中の弟子たちが示した態度であり(二四33)、さらに、イエスに助けを求める人間の恭順さをも表す(八2、九18、一五25)。マタイはこの語を好み、マルコやルカがこの語を使わない並行記事で6回もこの語を使っている(マタ八2、九18、一四33、一五25、二〇20、二八17)。

① 「疑う」

この動詞ディスタゾーは新約聖書には2回しか使われず、他の1回は、マタイ一四31「イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』と言われた」である。この語は「二つの・二度」という意味の語ディスが語根となる。「心が二つに分かれている・心がぐらついている」という意味合い。

⑧ 「だがその者たちは疑った」

17節の「その者たち」と訳した語は複数の男性冠詞。ここでの冠詞は代名詞の代用なので、「その者たち」と直訳している。しかし、「その者たち」とは誰のことなのか。次の四つの解釈がある。

① 「彼らは皆ひれ伏した。だが彼らすべてが疑った」

② 「彼らは皆ひれ伏した。だが彼らの一部が疑った」

③ 「ある者はひれ伏した。だが他の者は疑った」

④ 「彼らはひれ伏した。だが十一人以外の弟子たちが疑った」

ポイントになるのは、不変化詞「だが」の解釈だと思われる。「ひれ伏した」に対して、「だが」と言われているのなら、「疑った」とする②が可能になる。しかし、主語の変化を表しているのなら、①と③、特に④が可能になる。しかし、④の欠点は「十一人以外の弟子」がそこにいたとするのは無理があることである。また、③の欠点はマグダラのマリアを通してイエスから与えられた指示に従ってガリラヤに來た弟子たち皆が疑ったということの奇妙さにある。そこで、①が③の意味に訳するのが普通になっている。

② イエスは近づいて語った(18―20節)

① 「近づく」

マタイはこの語を52回使うが(マコ5回、ルカ10回)、多くの用例では、イエスに教えや癒しを求めて人々が近づく。イエスが「近づく」のは二度だけである。それはこと17章7節(イエスの変容)であり、いずれも近づく相手は弟子である。

② 「私にすべての権力が与えられた、天の中でそして地の上で」。イエスのこの言葉には次の三つの要素を見いだせる。

① 「すべての(一切の)」権力を授かったこと。新しい王の戴冠を偲ばせるような荘厳な言葉。

② その力は「すべてを」包括する。

③ 神が創造した世界全体をおおう力。「天の中でそして地の上で」と述べて、復活したイエスは、創造主である神が持つ無制限の力に参与していることを強調する。

④ 「すべての権力」。ダニエル7章14節との関連を思い起こさせる。ダニエル書では「人の子のよ

うな者」に「権威、威光、王権」が授けられている。マタイ福音書ではイエスに全権が授けられる。イエスの権威については以下の箇所を参照。権威ある教え(七29)、罪を赦す権威(九6)、人を癒す権威(九8、一〇1)。イエスは父である神から全権を託された決定的な(終末的な)支配者であり、その支配はあまねく全世界に及び、その救いは人間の思惑をはるかに越えて、すべての国民に至る。「すべての権力」、「すべての民」、「わたしがあなたがたに命じたすべて」、「すべての日々」というように、「すべての(パース)」を繰り返して使っている。これは、イエスに与えられた権能が決定的なものであることを示している。

④ 「すべての民」。イスラエルだけでなくすべての民に福音を宣教することが使徒の任務。イエスを信じる共同体は、地上に存在するすべての諸民族によって構成されることになるという事実が宣言される。イエスの言葉の中で繰り返される「すべてを」は、「完全さ」を強調するマタイの思想に合致している。

だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい(五48)。

旧約聖書は神の言葉(律法)の遵守を述べるときに、同じように「完全と全体」を強調している(申四2、特に三一11―12)。ユダヤ教が律法に与えていた決定的な性格がイエスに受け継がれた、とマタイは主張しようとしているのだろう。律法の不変性・不滅性がイエスの不変性・不滅性となる(マタ二四35「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」。イエスの教えは、その復活によって、さらに有効で、確固なものとなる)。

⑤ 「父と子と聖霊の名の中へ」

マタイ福音書の中に三位一体についての神学が確立されているわけではないが、「父」「子」「聖霊」の三者の緊密な結びつきについての信仰が表されている。洗礼は人を救い主イエスに結びつける。イエスの業はすべて父の愛に由来し、聖霊が流れ出すことによって完成する。

⑥ 「行って：弟子としなさい：洗礼を受けて：教えて」

イエスの言葉は三つの文章から成り立っている。

⑦ 最初の文章(18節)では、天と地上での全権力がイエスに与えられたと述べられている。

⑧ 次の文章(19―20節二行目)では、主動詞「あなたがたは弟子としなさい」の前後に三つの分詞が置かれている。弟子の使命の中心は「弟子とすること」にある。諸国民を「弟子とする」ために弟子は「行く」のであり、「洗礼を受けて」イエスのこと的一切を「教える」のは、彼らを弟子に仕上げるためである。「弟子とする」ということは、イエスとの人格的な交わりをいっそう緊密にすることであり、その関係を深めることである。

行って (アオリスト分詞)

あなたがたは弟子としなさい (主動詞)

洗礼を受けて (現在分詞)

教えて (現在分詞)

⑨ 三番目の文章(20節三・四行目)では、「見よ」という強調語の後に、「私はあなたがたと共にいる」という約束が述べられる。最初の文章では「天と地上」というように空間が意識され、三番目では「世の終りまで」というように時間が意識されている。この二つの文章に包

んで、イエスの指示が語られる。

g 「行って」

宣教の領域は、イエスの宣教の始めには、選ばれた民であるイスラエルに限定されていたが(一〇五)、イエスが復活した今は、すべての民を含むことになる(二四九・一四、一五三二)。

h 「名の中へ」。弟子の授ける洗礼は、三位一体の神の交わりに入るための洗礼である。これは、洗礼の際に共同体が使用していた定式句と見られている。また、この箇所は3章16節以下のイエスの洗礼を想起させると考える人もいる。だが、マタイはイエスの洗礼をキリスト者の洗礼の原型とは考えていないかもしれない。むしろ、イエスが神の子として宣言された出来事とされている。

i 「教えて」

教えるといっても単に知識を教えるのではなく、その結果、生活の場でイエスの勧めを実践するようになることを含む。これはマタイ5章以下の山上の説教で明らかに述べられていた。ここでは復活したイエスが地上の生涯において語った言葉を確認し、その実践へと弟子を励ましていく。教えるのはイエスの弟子を作るためであるが、教師(先生)はイエスのみである(二三8・10 「あなたがたの教師はキリスト一人である」)。

j 「私はあなたがたと共にいる」。

復活したイエスが世の終わりまで、いつも共にいることが約束されるが、この約束は現在形で書かれており、この約束の効力が今からずっと続くことを表している。この「わたしは共にいる」という約束は、福音書冒頭の幼子イエスの物語で予告された「インマヌエル」神は我々と共におられる」の実現である(一23、イザ七14参照)。復活者イエスが「共にいる」ことは、神が恒常的に「共にいる」ことの決定的な実現だという信仰によって受け入れられた事実を宣言している。

①旧約聖書では、神が民に「共にいる」という約束を与えた(創二六24、出三12、申二〇1・4、三一6、ヨシュエ9、士六12・16、イザ四一10、四三5)。マタイ福音書ではそれがイエスに当てはめられ、イエスが神の役割を果たす。復活者イエスは助け手として、また慰める者として、さらに励ます者として、「あなたがたと共にいる」。そのようなイエスによって民は新たな神の民とされる。イエスの「共に」は、瞑想や思索のうちに実現しているのではなく、現実的な力としてそこにある。イエスの「共に」は、状況がどのように変化しようが、弟子と分かちがたく結ばれている人間的な交わりである。

k 「すべての日々、世の終わりまで」

ここでの「世」は、時間によって区切られる有限な「時代」の意味。イエスの「共に」は世の終わりまで続く。マタイは主の再臨を待望するというよりは、「今・ここで」の、復活者イエスとの「共に」を大事にする。

③ イエスは疑う者に近づく

a 弟子たちはイエスの指示に従ってガリラヤに行く。イエスが指示した「山」がどの山であるかは分からない。しかし、山はイエスの本性が最も濃厚に顕される場所である。しかも、ガリラヤはイエスの宣教生活の大半が繰り広げられた地域である。復活したイエスが弟子に託す使命は、イエスが行った仕事の継承である。

⑤弟子たちはイエスを見てひれ伏す。しかし、彼らは「疑った」。疑った弟子は、弟子の一部とも解釈できるし、十一人全員だとすることもできる。どちらであれ、一部ではあれ、「疑う」弟子がいたのは確かである。この「疑う」という語は、元来「二つに分かれる」という意味である。マタ14章31節では、イエスのもとへと湖上を歩き始めたペトロが強い風を恐れて沈みかけたとき、イエスは彼を助け上げて、「なぜ疑ったのか」と問いかけている。ペトロの心は「二つに分かれている」。イエスのもとへ行きたいと思う心もあるが、荒れ狂う風を恐れる心もある。このように心が分かれた状態が「疑う」ということである。しかし、二人が舟に乗り込むと風は静まり、弟子たちは「本当にあなたは神の子です」と告白している。「疑う」ことを通して、弟子たちは信仰告白へと招かれている。弟子たちが復活のイエスと出会うこの場面でも同じである。指示に従ってガリラヤに行った弟子たちのように、イエスを追い求める心があれば、疑いは信じることへのステップとなりうる。

⑥17節は「疑った」という動詞で終わるが、18節はイエスの「近づいて」という行動で始まる。イエスは疑いを完全に乗り越えた者だけに近づくのではない。疑いを残す者にも近づく。この近づくイエスが語る言葉によって、弟子たちは疑いを乗り越える。それがすぐに成就するとは限らない。指示に従い、宣教に従事するときに、言葉の正しさを身をもって知り、疑いをぬぐい去ることもある。いずれにしても、復活し栄光に入ったイエスは弟子から遠ざかるのではなく、むしろ彼らに近づく。イエスは疑う者にも近づき、そのような弟子を宣教に派遣する。信仰の薄い彼らが働けるのは、イエスが彼らと「共にいる」からであり(20節)、両者が一体になって働くからである。弟子とは独りではなく、イエスと共に働く者のことでもある。

⑦イエスが語る言葉の特徴のひとつは、「すべての権力」、「すべての民」、「私があなたがたに命じたすべて」、「すべての日々」というように、「すべて」が繰り返されることである。この繰り返しのことによって、イエスに与えられた権能が決定的なものであることが表される。そして18節では「天の中で地の上で」という空間的な表象を用いて、全権がイエスに「与えられた」ことが告げられ、20節三行目以下では、「すべての日々、世の終わりまで」という時間的な表象を用いて、イエスが弟子たちと「共にいる」という約束が語られる。しかも、冒頭の「見よ」はこの約束の確かさを強調すると同時に、イエスが「インマヌエル(神は我々と共に)」と呼ばれるという予告(マタ1-23)が成就したことを示している。すべての権力を与えられたイエスが、19節-20節二行目の指示を弟子に与え、しかも常に共にいるとの約束(20節三行目以下)をも与えている。

⑧イエスのこの指示は、主動詞「弟子としなさい」と三つの分詞(「行って…洗礼を授けて…教えよ」)からなり、弟子の使命は人々を「弟子とすること」にその中心がある。マタイは「弟子」という言葉を非常に多く用いるが、弟子とすることは、まずはイエスとの交わりに招き入れることである。

⑨マタイではイエスは「福音を宣べ伝えなさい」ではなく、「弟子としなさい」と語る。マタイにとって福音にあずかることは、イエスの弟子となることである。弟子たちは現実と信仰のはざまにあつて心が二つに分かれ、疑うこともあるが、その疑う弟子にイエスは近づく。疑いを晴らすのは近づくイエスの言葉である。マタイはイエスが昇天したとは書かない。復活したイエスは弟子たちと共にいる。イエスは疑いをぬぐい切れない「あなたがた」とどこまでも共にいるために復活したのである。